

甘恋レシピ

目次

甘恋レシピ

5

番外編 飢えたライオンは水蜜桃すいみつとうの夢を見る

257

甘恋レシピ。

1 甘口ファーストキス

初めての感触は、私の涙を止めるのに十分なほど甘かった。重なった唇は、思っていたよりも柔らかくて、ミルクティーの味がする。あり得ないほど近い距離にある顔——伏せられたまつ毛はとても長い。

……って、この状況のほうが、あり得ないよ!!

「おい、目、閉じるよ」

唇を離し、夏目さんが言う。

「……む、む、無理ですよ」

初めてなんですからと返す前に、もう一度、唇が重なった。

——やっぱり、目は閉じられない。

数分前まで、単なる会社の先輩だった夏目光一さん。

今は、初めてのキスの相手。

ほんの一瞬で、大きく変わった関係に目眩がする。

……どっ、どっ、どうして、こんなことになってるの!?

十

「さあ、お手元にグラスは渡りましたか?」

商品開発部の竹内部長が立ち上がり、いつものとおり長めの挨拶を始める。

「えー、我らはラヴィソンという会社に属し、洋菓子という商品を介してお客様に夢と笑顔を与える、大変光栄な仕事をさせていただいております。これからも、商品開発部と企画営業部で力を合わせ、お客様の笑顔のために頑張っていきましょう。そして企画営業部の皆様には、より良い商品を作るために、材料費が高くなるのを大目に見えていただければ……」

五月最後の木曜日。

私、春日千歳が勤める製菓会社ラヴィソンの、商品開発部と企画営業部の懇親会——という名目の飲み会が始まるうとしていた。

「その点は善処しますから、とりあえず乾杯しましょう」

まだ四十歳手前なのに、もうすぐ部長さんになるだろうという噂がある、企画営業部の米沢課長が言う。

部長の乾杯の声のあと、かちゃんかちゃんとグラスがぶつかる音があたりに響いた。

「お疲れさまです。今日も素晴らしい音頭でした」

挨拶を終えて座った部長のグラスに、商品開発部の先輩である芦田さんがビールを注いだ。
……私もお酌したり、料理をお皿に取って渡したりしなくっちゃ。

そう思い、急いで料理を取り分けようとしたときだ。

「部長、お野菜多めにしました」

私の隣に座る一年後輩の栗林ちゃんが、お皿いっぱいサラダと少しの揚げ物を部長に差し出した。

先を越されてしまった……

「あっ、えっと……じゃあ、あの、私はビールをお注ぎします！」

ビール瓶を探してワタワタしていたら、部長が優しい笑みを向けてくれた。

「春日君は、僕のことなんか気にせずいっぱい食べなさい」

デキる先輩と後輩を持つ私は、横に大きな体を縮こまらせる。

「すみません……」

……ううっ、私って本当にどんくさいなあ。

「部長の言うとおりですよ。千歳さんは、にこにこ笑って食べてるだけで、まわりを幸せにするんですから」

そう言っ、栗林ちゃんは揚げ物をたくさん載せたお皿を渡してくれる。

「だな。春日にはいっぱい食べて、次の企画も大成功させてもらわなきゃ」

芦田さんも、私の大好きな厚焼き玉子のお皿をよこしてくれた。目の前に並ぶ好物たちに、思わ

ずにへっと頬を緩めてしまう。

「そうそう。春日君は、やっぱりそうやって笑ってるのがいいね」

と、いつも穏やかで優しい部長。他の二人も、うんうんと頷いている。

「……ありがとうございます。いただきます」

ぺこりと頭を下げて、お皿に箸を伸ばした。

唐揚げを口に入れた途端、幸せがぐわっと押し寄せてきた。

外はからりと、中はジューシー。次は、衣がさくさくした串揚げを頬張る。口の中に広がる、豚

トロのとろける脂がたまらない。

うーん、美味しい！

この居酒屋は、お料理がどれも絶品だ。箸を持つ手は止まらず、目の前のお皿はすぐ空になった。「美味しいものを食べているときの春日君は、本当に可愛いね」

もうすでに真つ赤な部長が、にこやかに言ってくれる。

……ああっ。また食べちゃった！ 薄着になる夏に向けて、揚げ物は控えようと思っただのに……

後悔の念を感じながら、私は緩みきっていた顔を歪めた。

食べるのが好きで、特に甘いものが大好き。そんな私が就職したラヴィソンは、主にコンビニ向けの洋生菓子を製造している会社だ。

私が所属するのは、商品開発部。コンビニから注文を受けて商品を開発したり、企画営業部と協力してコンビニに新商品を提案したりしている。

ラヴィソンでは近年、若い女性社員を商品開発部と企画営業部に多く配置して、女性向けスイーツの開発に力を入れていた。

入社と同時に商品開発部に配属されて二年。周りの人たちにも恵まれ、好きなことを仕事にしている自分は本当に幸せだと思う。

唯一の悩みは、全然減らない体重ぐらい……

一五〇センチ六十キロと、太め体型の私。生まれてから、痩せてたことなんか一度もない。

私の実家は、揚げ物が看板メニューの洋食屋。店の残り物ばかりを食べて育ち、『女はお母ちゃんみたいにくくよかなのが一番』と主張する父親に、ダイエットをことごとく邪魔されてきた。

だけど一番の問題は、ダイエットが長続きしない私の意思の弱さだ。

……落ち込んでる場合じゃない。明日から、またダイエット頑張ろう！

心の中で改めて誓ったとき、栗林ちゃんに顔を覗き込まれた。

「千歳さん？ 大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫。ごめんね、ぼーっとしてて」

「いえいえ、私たちもそろそろ、あっちのシマに移ったほうがいいかなと思ったんですけど」

ラヴィソンで貸し切っている個室の中、彼女が指さしたもうひとつのテーブルを見る。そこでは、すでに芦田さんが企画営業部の人たちにお酌をしていた。

本当に、気遣いができる人だなあ……

その上、いつも場を和ませてくれる芦田さんには、本当に頭が下がる。一年後輩なのに、私よりもよっぽど気が利く栗林ちゃんにも。

それにひきかえ私は……

栗林ちゃんが、胸までのまっすぐな黒髪を揺らし、「立てますか？」と聞いてくる。

ふんわりと甘いお香の匂いがした。

「栗林ちゃん、いい匂いがする……」

「食べないでくださいよ？」

大きなネコ目を細めて、栗林ちゃんは女の私でもドキリとするような顔を作った。

……ああ、隣にいるのが申し訳なくらいの美女だ。

私の髪の毛は、何もしてないのに茶色く、カールしている。伸ばすと収拾がつかなくなるので、肩までの長さにとどめていた。そしてお肉がついた頬に、垂れ目と、ぺちゃんとした低い鼻。

……全てが栗林ちゃんとは、正反対だ。羨ましいな……

行きましようかと言って、栗林ちゃんが歩き始める。私は慌てて付いていく。

目の前には、華奢な両肩を包むタイトなベージュのジャケット。初夏らしいミントブルーのプリーツスカートからは、すらりとした両足が伸びている。

サイズの関係で限られた格好しかできない私と違って、栗林ちゃんはいつも女の子らしい可愛い格好をしている。

キュツとしまったふくらはぎが綺麗だなあ、なんてオヤジみたいなことを思いつつ、自分の足首を見て——改めて愕然とした。

……えっと、どこが足首なの？

立ち止まって確認しようとしたら、硬いものにどすんとぶつかつた。

「す、すみません！」

とつさに謝って顔を上げると、そこには——

「こっちこそ、すみません」

そう低い声でぼそりと呟かれ、ふわふわしていた気持ちが一瞬で消えた。

「……どいてもらっても、いいですか？」

その言葉に、私は体をゆっくりと動かし、できるだけ壁際に寄つてうつむく。

「おーい、夏目。また春日さんをいじめてんのか？」

米沢課長の軽い声に、私はおそるおそる頭を上げる。

一ヶ月前まで同じチームで仕事をしていた企画営業部の夏目さんが、鋭い目を私に向けていた。

ひいつ!! ……こ、怖いよう。

出会ってから二年経つても慣れない視線に、全身が震える。

「俺、いじめてません」

……はい。私が勝手に怯えてるだけです……

「夏目、いい加減に自覚しろ。春日さん、大丈夫？」

夏目さんは何も答えなのまま、一番奥の席に向かって歩いていく。彼が座つたのを見届けてから、私は米沢課長に「大丈夫です」と返した。

「千歳さん、大丈夫ですか？」

先に席に着いてお酌をしていた栗林ちゃんが、心配して戻ってきてくれた。

「大丈夫。ごめんね」

私がそう言うと、栗林ちゃんは奥の人物に鋭い目を向けた。

「つたく、ちよつと顔がいいからって、愛想振りまかなくても生きていけるとでも思ってるんですかね」

ほほ笑みを浮かべつつも、呟く言葉は辛辣そのもの。社内で私だけに見せてくれる、ブラック栗

林ちゃんの降臨だ。

「おーい、その美女二人。俺たちにもお酌してくれると嬉しいなあ」

米沢課長の声で、我に返った。

「はーい！」

いつもの天使の笑顔で振り返つた栗林ちゃんは、私の手を取り、再び企画営業部のテーブルへ向

かう。

「ああやって、心にもないことを吐くヤツも、どうかと思えますけどね」

ぼそりと毒を吐いてから、栗林ちゃん是我的手を放し、近くににいる男性社員にお酌をし始めた。

私も米沢課長の隣に座り、グラスにビールを注ぐ。

「ああ、ありがとう。さつきは、夏目がごめんね。顔怖いけど、悪いヤツじゃないから」
「……はい、知ってます」

私は小さく頷き、社会人になって覚えた作り笑いを向ける。

「あいつは、もう少し愛想を覚えないなあ。春日さんも、一緒に仕事しにくかっただろ？」

そう聞かれて、夏目さんを見ると、彼は栗林ちゃんのお酌を断り、一人無言で細いグラスを傾けていた。

ぱちりと視線が合う。

「……いえ、助けていただいでばかりで申し訳なかつたです」

慌てて目を逸らしつつ、口を動かした。

入社四年目の彼は、企画営業部のホープ。いつも仕事しか目に入っていない様子で、無愛想な上に言葉が少ない。見た目が良いので社内でも社外でもモテるけれど、女子社員からの飲み会の誘いは、全て断り続けているらしい。

そんな夏目さんを、私が怖がる理由は些細なこと。

入社当時、社員食堂で目が合ったときに送られた視線が、すさまじく怖かつたのだ。

食べていたカレーのスプーンを、一張羅のベージュのスカートに落としてしまうくらい衝撃的だつた。

小さい頃に家族で行った動物園で、ガラス越しの至近距離から、ライオンに睨まれたときの恐怖を思い出した。

そんな視線を、入社してから二年もの間、私はずっと向けられ続けている。いつか食べられちゃうんじゃないだろうか……

そんな夏目さんと私が、今年の春先に同じチームで仕事をする事になった。

「あのとき夏目のヤツ、春日さんに失礼な態度取つてたろ」

「……いえ、失礼だなんて思つてませんよ」

初めてのミーティングで自己紹介したあと、彼に言われた。

『春日さんは食べるのが好きだから、頼りになりそうですね』

それからというものが、顔を合わせるたび、夏目さんはお腹が空いてないかと聞いてきて、いいえと答えても、問答無用で試食用のスイーツや取引先からいただいた食べ物、私の机に置いてくれたのだ。

恥を忍んで、ダイエット中なんですと断つたら、夏目さんに言われた。

『春日さん、ダイエットなんか必要ないですよ。……それとも、俺の渡すものなんか食べられないとでも言うんですか？』

……もつと太らせて、食べようとしているんですか？

なんて言い返したかったけれど、できるわけがなかった。

家ではお父ちゃんに、会社では夏目さんに邪魔され、私のダイエットはまたもや失敗に終わったのだ。

「でも、あれは春日さんからすれば嫌がらせだよな」

やっぱり、そうだったのかな……

夏目さんは基本的に、とても礼儀正しい。その反面クールで、あまり雑談とかはしない。猛獣みたいな視線を向けたり、お菓子を押しついたりするのは、私にだけだ。

私が太ってるから、からかって面白がっていたんだろう。でも、もしかしたら——
「……気を使ってくれたのかも……」

思っていることが口から出てしまった私に、米沢課長は目を見開いたあと、表情を崩した。

「春日さんは、本当に大きい人だなあ」

「それは、体がですか？」

「違う違う。優しくて、いい女だなあって意味だよ」

そう言っつて、米沢課長は目尻のシワを深くする。

米沢課長が二十代の男子社員よりモテるのは、こういうところが要因かも。

「……ありがとうございます。お世辞でも嬉しいですよ」

これが大人の男の人の魅力なんだろうなあ、と思いつながらそう返した。

「お世辞じゃないんだけどなあ。まあ、夏目のヤツは、もう一度ちゃんと怒っとくから」

私は力なく笑った。

ラヴィソンは食品会社だけれど、普通体型か痩せ型の女子社員がほとんどで、太めの私は悪目立ちしている。取引先の人が私の名前を思い出せなかったとき、「おたくのふくよかな子」と言ったら社内の人間にすんなり通じたくらいだ。

そんな私の容姿が、不愉快だつて言う人もいる。だから、夏目さんもきつと……

そうは思いつつも、本人にそれを確かめられないまま、先週、同じチームでの仕事は終わった。

とはいえ夏目さんは、大きな企画に初めて関わった私に対して、いつも丁寧すぎるほど色々説明してくれ、細かなフォローもしてくれた。

そのおかげで大したミスもなく、私のアイデアが商品化され、企画は成功したのだ。

「春日さんは愛されキャラだから、大変だね」

夏目さんの鋭い視線を思い返していた私に、米沢課長はそう言っつてにやりと笑った。

「……こんな、横に大きい女なんて、誰からも愛されませんよ」

小さい頃は、大人になれば、すなりとした女の人になれると夢見ていた。そして素敵な男の人と恋に落ちて結婚し、家族を作れると。

でも、そんな夢はひとつも叶わないまま、私はもうすぐ二十五歳になってしまふ。

「こらっ。自分でそんなこと言うから、変な顔になつてるよ」

米沢課長におでこを指で軽く弾かれ、私はいつの間にかうつむいていた顔を上げた。

「可愛い子は、笑つてないかね」

そう言いながら、米沢課長が顔を覗き込んでくる。お世辞だとわかっついても、動揺してしまつた。

「春日さんもどうぞ」

空のグラスを差し出され、慌てて受け取る。米沢課長は私の手にしていたビールの瓶を取り上げ

て、注いでくれた。

課長とグラスを合わせたあと、渴いた喉に一気にビールを流し込む。

「ところでさあ、春日さんは、最近どうなの？」

いつもはグラスに唇をつけるだけで誤魔化しているのに、思わず飲んでしまった。口の中が炭酸と苦い味でいっぱいだ。空になったグラスをテーブルに置いてから、口を開く。

「……何がですか？」

「今、彼氏とかいないの？」

自分の顔が、一瞬で固まるのがわかった。

「……そんなの、いるわけないじゃないですか」

「じゃあさ、今まで付き合ってたヤツって、どんな感じ？」

どつくんと心臓が大きく鳴って、鼓動が速くなる。

「学生時代、春日さんなら彼氏くらいいたでしょ？」

何か言わなきゃと思うけれど、歪みそうになる表情を取り繕うだけで、いっぱいいっぱいだ。

「ねえ、春日さん？」

どんどん大きくなる心臓の音と、熱くなる体。口の中に苦味が広がっていくのは、ビールのせいだけじゃない。

言葉紡ぎ出せない自分が情けなくて、涙が出そうになったときだ。

ばしゃつという水音が、私の心臓の音を消した。

「おいっ、何やってんだ！」

「……さーせん。酔っぱらってるみたいですよ」

視界に入ったのは、床に転がるビール瓶と、大きな背中。

小さいけれど耳に響く声を聞き、米沢課長と私の間にいるのが誰だかわかった。

「……足元ふらついちゃって、つまずきました」

こんな距離が近いのは初めてだ。けど私に背中を向けているから、あの怖い目で見られることはない。助かったなと思った瞬間、その人がぐるりとこちらを振り返った。

「ごめん、春日さん。またスカート汚して」

えっ？　と思つて視線を落とすと、穿いている白いスカートに、ぼつぼつと黄色い染みがあった。

「つたく。夏目は俺が怒っておくから、春日さんは早くトイレでスカート拭いておいで」

米沢課長が夏目さんを睨んだあと、私に笑顔を向けて言ってくれた。

「……はい、失礼します」

夏目さんを見ないように立ち上がり、ふらつく足を動かして部屋を出る。扉を閉める前に、ちらりと後ろを振り返ると、彼が米沢課長の前で正座しているのが見えた。

夏目さんがこちらを振り返ったので、慌てて前を向く。

扉を閉め、廊下を進むにつれて、私の顔はどんどん熱くなっていった。

……もしかして、助けてくれたの？

お手洗いの前で、頭を左右に強く振る。

あり得ないよ。私、嫌われてるんだから……
心の中で自分に言い聞かせつつ、扉を引いた。

「ひゃあっ!」

どんつと温かいものにぶつかり、間抜けな声が出る。

「……ちよつと、ちゃんと前見てよ」

すみませんと言いなながら目線を上げると、目の前に綺麗な顔があった。

茨姫いばらめというあだ名がついている超美人、桐谷紅花きりたにべにかさんだ。

夏目さんと同じく、企画営業部のホープで社内の有名人。

背が高く手足が長く、肩までのまつすぐな茶色い髪の毛が、きりつと整った顔を引き立てている。パンツスーツが似合う見た目どおり、男子社員も一目置くぐらいの仕事ぶり。

私とは百八十度違う風貌と、さばさばした雰囲気。こんな風になりたかったという、私の理想像が桐谷さんだ。

「ねえ、どいてくれる?」

こんなに間近で見るのは初めてで、つい見惚みとれてしまった。慌てて、桐谷さんの二倍は厚みがある体をどける。

その横をすり抜けていった桐谷さんからは、百合のいい香りがした。

……ああ、綺麗な人は匂いも素敵だなあ。

鼻をひくひくさせていると、後ろから肩を叩かれた。

びくつと跳ねて後ろを振り返った途端、全身が震える。

なっ、なっ、何で!?

「それ、取れないのか?」

夏目さんが、いつもの冷たい目で私のスカートを見下ろしていた。腕を伸ばさなくても届きそうなほど近くに彼がいるという事実、体が固まる。

……こっ、怖い。早く逃げたい!

「すっ、すみません。まだです。今から洗ってきます!」

恐怖に耐えきれず、下を向いてしまう。そして急いで、お手洗いに入ろうとしたら――

「待て」

その声とともに、腕をつかまれた。

離してくださいと言ったために、震える口を開く。けれど私が言葉を吐くより先に、重たい体が勝手にくるりと回転する。

「行くぞ」

夏目さんに腕を引かれ、あつという間に居酒屋の玄関まで連れていかれた。

なっ、何で!?

下駄箱の前で、腕を放される。私は開きっぱなしの口から、ようやく言葉を絞り出した。

「……あの、どうしたんですか?」

もしや今から、夏目さんが私に対して抱えていた不満をぶつけられるんじゃない……

恐怖のあまり、体温がさあつと下がる気がした。
 「米よさんが、春日さんに迷惑かけたお詫びに、接待してこいって」
 そう言いながら私を見る彼の目に、心臓をわしづかみにされた。
 猛獣に、獲物として捕まった子豚って、こんな気持ちなんだろうか……。いくら凶々しい私だつて、自分をウサギだなんて言わない。

「だから、ついてきて」

夏目さんはそう言い捨てると、さつさと靴を履はき、お店から出ていった。彼の手には、なぜか私の鞆かばんがある。慌てて追いかけると、さらに強い視線を向けられた。

そんな目で見るくらいなら、何で……。上司の命令とはいえ、嫌なら断ればよかつたのに……

「行くぞ」

「……行きません」

顔を見るのが怖くて、下を向いた状態で口を動かす。

「これぐらいの染み、大したことないですし。それともまた、私をからかつて楽しみたいんですか？ ……こんな醜みにくい女なんか、見てるだけで不快でしょう？」

震える声で言いきると、彼に背中を向けて一步踏み出す。

……仕事なら耐えられるけど、二人きりでどこかへ行くなんて無理だよ。

そう思っつて、この場から一刻も早く立ち去ろうとしたのに――

「おい、いつだ」

低い声で言い、私の太い腕をつかむ夏目さん。

「いつ、俺がお前にそんなこと言った？」

ひいっ!!

振り返ると、これまでで一番怖い夏目さんの顔があつた。全身がかちんと固まる。

「言葉よ」

恐怖のため、首を左右に振ることしかできなかった。両目から、じわりと涙が溢れそうになる。何か言わなくちゃと、口を開いた瞬間だつた。

ぱんつと、小さな音が聞こえた。

私のブラウスのボタンが弾け飛んだのだ。それは夏目さんの額を直撃する。

——もう、ダメだ。

目の前の切れ長の瞳が、丸くなる。

夏目さんは私の腕を放すと、ころころと地面を転がる小さなボタンを拾い、差し出してくれた。

「……す、すみません……」

なんなの、このタイミングの悪さ。

すぐにでも逃げ去りたかつたけれど、足がすくんで動かない。

仕方なく、震える手でボタンを受け取つた。

ああ、さつき調子に乗つて、あんなに食べるんじゃなかつた。

謝罪さえできずに黙り込んでいたら、右手が大きくて熱いものに包まれた。

「……そんなに怖がるな。怒ってないから」
「……えっ？」

初めて聞く柔らかい声に、顔をゆつくりと上げる。
「だから、今から少しだけ付き合ってくれ。頼む」
そんなセリフとともに、頭を深く下げられた。

「……はい」
「ちよっ、私、何言ってるの!？」

勝手に口から出た言葉に、自分で驚く。夏目さんを見れば、いつもどおり何を考えているかわからない顔を上げ、私の手を握ってきた。私は下を向いたまま、転ばないように足を動かし始める。

どこに連れていかれるんだろうと思っていると、居酒屋から少し離れたところにある小さな公園に着いた。入り口に自動販売機、真ん中に照明灯とベンチ、あとは滑り台しかない。

ベンチの横で、夏目さんの足が止まった。

彼は私の手を放すと、自動販売機へ向かう。

やがて両手に缶を持って戻ってきた夏目さんは、呆れたように「座って待ってりゃいいのに」と言つて、どかりとベンチに腰かけた。

なるべく距離を取つてその横に座ると、飲み口を開けた缶が、目の前に差し出される。

受け取って一口飲むと、ミルクティーの甘い味が、体の力を抜いてくれた。

……つて、ほっとしている場合じゃないのに。

「それ、いつも飲んでるだろ」

同じデザインの缶に口をつけてから、夏目さんが言った。

私がこのミルクティーを好きなの、知ってたんだ……。というより、この大きな体が、勝手に夏目さんの視界に入ってたんだろな。

「……すみません……」

そう言うと同時に、さつきは我慢できた涙が両目から零こぼれた。

「お前な。さつきから、一体なんなんだよ」

私だって、知りたいですよ。こんな鬱陶うっとうしい態度、何で取ってしまうのか。

答えはわからないし、涙も止められない。すみませんと言いながら、顔を下に向けることしかできなかつた。

「……さつき、米さんに怒られた。俺、無意識にお前をいじめてるのか？」

違います、と小さく答えて、顔を上げた。

「じゃあ何で、俺がお前をからかかってるとか、見てると不快だろうなんて言うんだよ」

私は少し間を空けて、しよっぱくなつた口を開く。

「……夏目さんは、私にだけ態度が違うから」

「それは……」

明らかに気まずそうな顔をする夏目さん。私は涙が止まらないまま言葉を重ねた。

「入社したときから、夏目さん……私を見る目が他の人とは違います」

「……気付いてたのか」

わかっていたのに、肯定されたショックで顔が歪ゆがんでしまう。

「それって、やっぱり私のことが不快だからですよ」

「おい、ちょっと待て。何でそうなるんだよ？」

「……高校生のときに……言われたことがあるからです。勝手に視界に入ってくるでかい体が、見ただけで不快だつて……」

ああ、そうだ。夏目さんは、あの人と少し似てるんだ。

「私が初めて好きになって……告白して付き合った人に……そう、言われたんです……」

女子にすごくモテていた彼に、卒業式の一ヶ月前、勇気を振り絞つて告白した。気持ちを伝えるだけでいいと思っていたのに、付き合おうかと言われ、私は天にも上る気持ちになった。

「……でも、それは、彼にとつては……ただの、友達との賭けだったんです」

一週間登下校を共にし、休みの日に家に誘われた。

緊張しながら彼の部屋に入った途端、ベッドに押し倒された私は、彼を突き飛ばして逃げたのだ。そして月曜日の放課後、何も言わずに逃げ出してしまったことを謝ろうと思った。二人で話したいと言ったのに、待ち合わせ場所に現れたのは、彼とその男友達数人。その中の一人から、にやにやしながら賭けに勝たせてくれてありがとうと言われ、何のことかわからなかった。

『からかわれてるって、わかんなかったのか？ 一週間のうちにエッチできるか賭けてただけだよ。』

じゃなきゃ、誰がお前なんかと付き合うかよ。勝手に視界に入ってくるでかい体とか、見るだけで不快なのに』

そう彼に言われ、私は大きなショックを受けた。

そのあと、家までどうやって帰ったか覚えていない。

いつまでも頭の中で再生される、笑い声と彼の言葉。自分の部屋で布団にくるまっていたら、祖母が心配して様子を見に来てくれた。

促うながされて階下へ向かうと、居間のちゃぶ台の上には、ほかほかと湯気を上げる祖母手作りの蒸しパン。小さい頃からの好物だ。

祖母は何も聞かず、温かいお茶を用意してくれ、食べなさいと言った。薄い黄色のふわふわした蒸しパンを両手で持って口に運ぶ。途端に優しい甘さが広がって、目から涙なみだが零れた。

食べながら、いつまでも泣いた。祖母は、それを優しく黙って見守ってくれた。今はもういない、祖母との大切な思い出。

「……あつ。結局、食べ物の話になっちゃいましたね。……ははっ、本当に私つて……。だから恋愛ができませんですよ」

さつきから一人で喋しゃべっている私を、隣に座る人はどう思っているんだろうか。怖くて顔を上げられない。

勝手に怯えられた挙句に、こんな話まで聞かされて、本当に不快だろうな。

……そう、私がこんなだから。

「わかっているんです。この体型のせいだけじゃなく、私自身がダメなんだって……」

彼に振られてから、男の人が怖くなって、必要以上に近づかなくなった。そして恋愛に対しても、消極的になった。

大学を卒業して就職までしたのに、それは変わらない。

私は一生この重い体を抱えて、外見も中身も醜みにくいまま生きていくのだろう。

「……恋愛なんて、私には一生できないんです」

こんな自分が、男の人に好かれ、愛されることなんてないのだ。

——すみません、迷惑かけた上にこんな話まで聞かせて……。これからは、なるべく視界に入らないように努力しますから許してください。

そう、言葉を絞り出そうとしたときだった。

「……そんなこと、誰が決めたんだよ」

いきなり、視界が開けた。

夏目さんが私の顔を両手で包み、上向かせたからだ。

「誤解させたなら謝る。けど、からかってなんかいない。俺を、お前を傷つけたヤツと一緒にするな」

彼は、強い口調で言った。思わず腕で顔を隠そうとしたけれど、その腕をつかまれてしまう。

「すみません。私の話が不快だったのなら謝——」

「もう、黙れ」

怒っているのとは違う、苦しそうな、不思議な夏目さんの表情。次の瞬間、体が何かに包まれた。彼に抱きしめられていると気が付いた途端、全身に、ぶわっと熱が広がる。

……なっ、なっ、なっ、何これ!?

抵抗しようとしても、両腕に力が入らない。心臓の音が、どんどんと太鼓みたいに大きく響く。

夏目さんのスーツから香る、ラムネのような匂い。それを感じた瞬間、大きな手が私の頬にそつと重なり、顔を上げさせられた。

「……辛いことを話させて悪かった。お前は醜みにくなんかない。……可愛いよ」

その言葉を聞くと、怖くも悲しくもないのにまた涙が零こぼれた。

「すごく可愛い」

何で、そんなこと言ってくれるの……?

質問もできないまま頬を濡らす私に、夏目さんは目を閉じると言った。

——そして、二人の唇が重なった。

+

「……嫌じゃないのか？」

二度目のキスが終わると、夏目さんがぼつりと言った。

「……えっ？」

ここに至るまでの経緯をたどり直してみたけれど、どうしてこうなっているかも、夏目さんの質問の意味もわからなかった。目の前にある真剣な顔を、まともに見られなくてうつむいてしまう。

「お前は、誰でもキスするのか？」

「なっ、何言ってるんですか!? そんなわけないでしょっ!!」

慌てて顔を上げたら、頬を両手で包まれた。

「じゃあ、何で俺とキスしたんだ？ 嫌じゃなかったのか？」

……何でって、な、夏目さんが不意打ちで……

「答えるよ」

また近づいてくる顔。やっぱり目は閉じられない。さっき重なっていた唇が目の前であって、どくりと心臓が鳴った。

「……いつ、嫌じゃないです……」

ちよっ、私、何言ってるの……!?

「嫌じゃなかったら、誰でもキスするのか？」

「私は、好きな人とじゃないとキスしません!!」

自分の発言に驚いていると、頬から手が離れた。目の前の夏目さんが、見たことのない表情を浮かべる。

「……そうか。次のときは、目、閉じろよ。——行くぞ」

私から体を離し、初めて笑顔を見せてくれた夏目さん。彼はベンチから立ち上がって、歩き出した。

「早く、ついてこい」

少し離れた場所から聞こえてきた声に、ゆっくりと腰を上げた。ふらりと両足を動かす。

平らな場所ですまずき、転ぶ！ と思ったら、斜めの体勢で止まった。

「……何やってんだ」

太い腕をつかんでくれていた手が移動して、私の右手を包む。

「行くぞ」

もう一度言われ、顔を見ないまま頷いた。

これからどこに行くんだろうと思いつながら、ふわふわと柔らかく感じる地面を歩き、大通りに出る。

そこで私の手を放し、夏目さんはタクシーを止めた。

「おやすみ」

私と私の鞆かばんをタクシーに乗せると、いつもどおりの無表情で夏目さんは言った。

ばたんつと扉が閉まって、タクシーがゆっくりと走り出す。

……あれ、私、何でタクシーに乗ってるんだろう……?

そのまま車に揺られていたら、とんとんとんとと何かの音が聞こえてきた。少し遅れて、そ

れが自分の心臓の音だと気付く。

途端に公園での出来事が、ぶわっと浮かんできた。鮮明な映像のように流れていくその光景は、最後に、長いまつ毛を伏せた精悍な顔のアップで止まる。

あやうく叫び声を上げそうになり、両手で口を押さえた瞬間、タクシーが家の前で止まった。どうやら無意識のうちに、行き先を伝えていたらしい。

震える手でお金を払い、タクシーから降りる。そして熱があるときみたいにふらつく体を引かず、裏口の扉を開けた。

「千歳！ 遅いぞ！」

「ちーちゃん、お帰り。早かったのねえ」

居間から両親の声がして、体がびくりと震える。

いまだに履きなれないパンプスを脱いで上がると、お父ちゃんが近づいてきて顔をしかめた。

「おい、お前、酒臭いぞ」

晩酌をしていたらしいお父ちゃん——多分、私よりお酒臭い——から後ずさりする。

「哲夫さん、当たり前でしょ。ちーちゃん、今日は会社の飲み会だったんだから」

お母ちゃんの、のんびりした声。私は、お父ちゃんが口を開く前にその横をすり抜け、「疲れたから寝るね」と言つて、ぼたぼたと階段を上がった。

二階の自分の部屋に入り、扉を閉める。そして電気も点けずに、ぼふんと音を立ててベッドに体を沈めた。

上着がシワになるなど思いながら、たっぷりとお肉がついた体を自分で抱きしめる。

心臓の音も体の熱さも、どんどんひどくなつていく。

目を閉じるとさっきの残像とミルクティーの味が蘇^{よみがえ}ってきた。

……キス、しちゃったんだよね……二回も。

『私は、好きな人とじゃないとキスしません!!』

どうして、あんなことを言ってしまったんだらう？

一回目は不意打ちだったけど、二回目は拒否できた。……なのに、私はどうして。

初めて見た、夏目さんの笑顔を思い出す。

『すごく可愛い』

叫びたいのを我慢して、ごろごろと布団の上を転がった。

『……次のときは、目、閉じろよ』

耳のあたりから、ぞわりと毛が逆立つ。

どっ、どっ、どっ、どっ、どうしよう。明日、どんな顔して夏目さんに会えばいいのっ？

それに、つ、次つて、次があるのっ!?

我慢できなくなり、布団にくるまって叫び出してしまふ。それでも足りなくて、ベッドの上を転がっていると、壁に思い切り後頭部をぶつけた。

ちかちかと、小さい星が視界に現れる。

そこで不意に、自分の声が聞こえてきた。

『恋愛なんて、私には一生できないんです』
急に冷静になった。私は、自分に向けて言う。

「……何、浮かれてんの」

あのときの気持ちを、忘れてはいけない。

……そうだよ。夏目さんは私の暗い話に同情して、慰めてくれただけ。

でも、そうだとしたら、夏目さんって……

ぶんぶん頭を振り、布団から出て上半身を起こす。そして、彼に二度もキスされた唇を指でなぞる。彼の唇の感触を思い出したけれど、心臓は高鳴らなかつた。

次なんか、あるはずがないから。

十

最初で最後のキスを経験した次の日。

できることなら、会社を休んでしまいたかつた。

「千歳さん、おはようございます」

会社に入ろうとしたところで、肩を叩かれる。振り返った私の顔を見た栗林ちゃんが、ぎよつと
した。

「おはよう。……ごめんね。朝から変なものを見せて」

今朝、洗面所の鏡に映っていた顔。両目がぷくりと腫れ、その下には黒いクマができていて、その上ぼんぼんにむくんでいた。ただでさえ大きな私の顔が、さらに大きくなっていたのだ。

朝まで一睡もできず、寝不足で頭がふらふらしている私の手を、栗林ちゃんが握つた。

「とりあえず、その顔なんとかしましょう」

そう言われ、一番利用者が少ない一階のお手洗いに連れていかれた。

栗林ちゃんは私を洗面台の前に立たせ、鞆かぼんからポーチを取り出す。目を閉じてくださいと言われ、素直に従つた。

「……やつぱり、夏目に何かされたんですね」

重い瞼まぶたに、すうつとする冷たいクリームを塗りながらそう言われ、心臓が跳ねる。

くっ、栗林ちゃんってエスパーなの!?

「夏目のヤツ、どうしてやろうか」

顔は見えないけれど、声の調子でブラック栗林ちゃんになっているのがわかる。

「だ、大丈夫。何もされてないよ」

「千歳さん、目を開けて同じセリフを言ってみてください」

ううつ、嘘ついたのバレてる……

覚悟を決めてゆつくり瞼を開けると、目の前には、薄いメイクが施された可愛らしい顔があつた。

「……栗林ちゃんは、いいなあ」

彼女みたいな外見だつたら、悩みなんてないんだろう。神様は不公平だな……なんて思っていた

ら、ぎゅうつと鼻をつままれた。

「千歳さん、何かあったら、すぐに言ってくださいね。そんな顔してたら、心配になります」
私の鼻から手を離し、栗林ちゃんが笑顔で言ってくれる。

さつきまでの、自分の馬鹿な考えが恥ずかしくなった。栗林ちゃんは歳下なのに、とてもしっかりしていて優しい。外見も内面も、とても素敵な女の子なのだ。

アイメイクをしていますがと言われ、お願いしますと答えてから、また瞼まぶたを閉じた。

「昨日、二人の姿が見えないと思つてたら、夏目が一人で戻ってきたから心配してたんですよ。何かされたんじゃないかって」

目の周りに何かを塗られているのを感じながら、栗林ちゃんの声を黙つて聞く。

「夏目のヤツ、いつも千歳さんをいやらしい目で見てましたからね」

「えっ？」

思わず目を開けると、閉じてくださいと言われてしまった。

「いつ、いやらしいって、なにそれ。冷たい目じゃなくて？」

「……千歳さんは、もう少し色々自覚したほうがいいかもしれませんね」

「い、色々って？」

質問への答えはなく、マスカラを付けますねと返された。

「すみません、さっきの私の発言は気にしないでください。私って、人のことを観察しすぎなんです」

「……栗林ちゃんはずいよ」

鈍感で気が回らない私からすれば、栗林ちゃんの観察眼と気配り上手なところは尊敬の対象だ。

「ありがとうございます。でも私より、千歳さんのほうがモテモテですから」

声のトーンが変わったことに気付いて、私は目を開けた。

「ああ、すみません。……千歳さんが羨うらやましくて、八つ当たりしてしまいました」

「……栗林ちゃん？」

マスカラの蓋だたを閉める栗林ちゃんの顔が、強張こわばっていく。

「私、昨日、振られたんです」

少し間を空けて、栗林ちゃんは続けた。

「……振られた相手に、千歳さんの可愛さを見習って言われてしまって、少しへこんでます」

そう言つて、栗林ちゃんは笑顔を作った。多分、私に気を使つて。

こんなにも優しく可愛い栗林ちゃんに、そんな暴言を吐くなんて許せない……！

「その相手さん、どうしてやるうか」

ぼそりと零こぼれた言葉に、栗林ちゃんの笑い声が返ってきた。

「……栗林ちゃん。相手さんって誰なの？」

「まだ片方しかマスカラ塗れてないんで、もう一度目を閉じてもらつていいですか？」

質問をスルーされたけれど、私は素直に「はい」と返事をした。その質問には答えたくないみたいだから。

できませんでしたよと言われ、目を開けて鏡を見ると、家で見たのより数倍ましになった顔があった。「ありがとう。……あと、何かごめんね。私なんかより栗林ちゃんのほうが百倍……ううん、千倍可愛いよ。何か私にできることがあれば、何でも——」

「千歳さん、そういうところですよ」「え？」

「そういうところが素敵なんです。みんな、ちゃんと見てますよ」

優しくほほ笑んで言ったあと、栗林ちゃんは少し意地悪な表情を浮かべた。

「夏目に何かされたら、すぐに言ってくださいね。千歳さんを泣かせるような真似したら、会社にいられなくしてやりますから」

ブラック栗林ちゃんが、笑顔で恐ろしい言葉を吐く。

「私は、それくらい千歳さんが好きです」

照れながら、私はありがとうと返した。

「それに、私、頑張りますから。一回拒まれたくらいじゃあきらめません。だから大丈夫です」

栗林ちゃんは、鏡越しの自分に言い聞かせているように見えた。彼女が心を許してくれていることを改めて実感して、思わず顔が緩む。

何、笑ってるんですか？ と栗林ちゃんが言った。

二人で顔を見合わせて小さく笑い声を上げてから、二階へ向かう。

そして廊下を歩いていると、商品開発部の入り口に、長身の男の人が立っているのが見えた。

「春日さん」

私の名前を呼び、こちらに向かってくる。

「おはよう。昨日、大丈夫だった？」

企画営業部は四階なのに、何でいるんですか？ 米沢課長。

「いやあ、なんだか余計なことしちゃったな」

「……いえ、大丈夫です。ご心配おかけしてすみませんでした」

「夏目がさ」

その名前を聞いた瞬間、心臓が大きな音を立て始め、むくんだ頬の肉が固まる。

「春日さんを送ったあと、居酒屋に戻ってきたんだけど……。ごめんね、あいつと少しでも親睦を深めてもらえたらと思って。でも、逆効果だったかな」

返事をしなきゃいけないのに、口が動かない。それに、心臓の音がうるさい。

「米沢課長、始業時間になるので失礼してもいいですか？」

私の代わりに、栗林ちゃんが口を開いた。

「ああ、悪い。じゃあ、またね。春日さん」

ぼんつと、私の頭に大きな手を置いて、米沢課長はその場を去った。

「……私に、またね、はないんですね」

ぼそりと聞こえてきた声。

「栗林ちゃん？」

「すみません。振られた翌日、その相手に会うのはさすがにキツイですね」
栗林ちゃんが漏らした言葉に、思わず口をあんどぐり開けてしまう。

「さあ、お仕事の時間です。プライベートは置いておきましょう」
そう言つて栗林ちゃんが扉を開け、部屋に入った。呆けていた私は慌ててそれに続き、自分のデスクに座つてパソコンを立ち上げる。

……全然気が付かなかつた。栗林ちゃん、いつから米沢課長のこと……
衝撃的事実にまたもや呆然としていたら、芦田さんから、何フリーズしてんだ？ と声をかけられた。

我に戻つて、仕事に集中しようとしたときだつた。

「失礼します」

低い声とともに扉が開く音がして、心臓が大きく跳ねた。

とつさに振り返りそうになる体を抑え、マウスを持つ手が震えないように努める。その手の中に、汗が滲しみんでくるのがわかつた。

「春日さん、素晴らしいですか」

後ろから聞こえた夏目さんの声に、びくりとしてしまう。

どつ、どつ、どんな顔したらいいかわかんない!!

「……はっ、はい」

「これ、この間の企画の報告書なんですけど、少し抜けがあつたんで」

私は顔を下に向けたまま、椅子ごとくると振り向く。そして、こちらに差し出されたクリアファイルを受け取り、わかりましたと返事をした。

「訂正箇所にふせん貼つてますから、再提出お願いします」

昨日とは違う、硬くて丁寧ないつもどおりの口調。私は、ゆっくりと顔を上げた。

「わからないところがあれば説明しますんで、聞いてください。お邪魔しました」

こちらに向けられる冷静な瞳に、なぜか胸がずきんと痛んだ。そんな私に背を向けて、夏目さんは部屋を出ていく。それを見届けてから、椅子を回して再びパソコンに向き合う。

……私、本当に自意識過剰だな。何を期待してるの？

クリアファイルを机に置き、小さく息を吐いた瞬間――

「おめでとう」

後ろから肩をつかまれた。振り向くと、部長の笑顔がある。

「キャロルとの合同企画チームに、春日君が参加することになりました」

「……えっ？」

部長の言つたことが一瞬理解できなくて、言葉に詰まる。

「すげえ、良かったな春日！ この案件、やりたがつてたもんな」

私の代わりに芦田さんが声を上げた。

「すごいです！ 千歳さんなら、絶対に成功させられます」

いつの間にか隣に立っていた栗林ちゃんも、私の手を握つて言う。

部長の言葉を、もう一度頭の中で再生して、やっと私は理解した。

「えええええっ!? わっ、私がキャロルのチームにですか!？」

大声を出してしまった私の顔を、周りの人たちはにこにこしながら見ている。

私が大好きな高級洋菓子メーカー、キャロル。六十年の歴史を持つ老舗だが、ここ数年で店舗数を増やし、去年からは百貨店にも出店して全国的な人気を得ている。

今、洋菓子メーカーで一番勢いがあると言っても過言ではないそのキャロルが、コンビ二のコーポレーションスイーツを展開することになった。協力会社として名乗りを上げた数十社の中から、ラヴィソンが指名されたと聞いたときは、とても嬉しかった。

「……でも、何で私が、こんな大きな案件を任せてもらえるんですか？」

密かにいくつか商品案を考えてはいたけれど、企画に関わるなんて思っていなかったのに。

「向こうさんのご指名なんだよ」

「ええっ!? ちょっと待ってください、意味がわかりません!」

焦る私に、竹内部長はにこにこしながら言う。

「キャロルの専務が、春日君がこの前成功させた企画にすごく興味を持っていてね。どんな人物か聞いてきたから、高校生の頃から店舗に通い詰めるほどキャロルの大ファンで、合同企画に対しても並々ならぬ情熱を燃やしてますって答えたら、決まっちゃった」

てへっと首を傾げ、竹内部長は笑った。その仕草は、とても可愛らしかったけれど――
私の背中に、どすんと重いものが乗ってきた。

嬉しいけど、プレッシャーが半端ないよ!

「チームに参加するのは、うちの部署からは春日君。企画営業部からは、米沢君、桐谷君、夏目君だ」

最後の名前を聞いた私は、両手をぎゅっと握った。

「企画営業部の精鋭と一緒だから、心配することないよ」

部長の言葉のあと、私にだけ聞こえる声で、栗林ちゃんが呟いた。

「親睦しんむくって、そういうことだったんですね」

……そっか、米沢課長はこのことを知ってたから、ああいう気の回し方をしたんだ。

ちなみに私が入社する前、ラヴィソンに企画営業部はなかった。

コンビ二から注文された商品しか作っていなかった当時、ラヴィソンのほうからコンビ二側に新商品を提案する部署を作ろうという声が上がリ、立ち上げに大きく関わったのが米沢課長だという。今では、うちから提案する商品とコンビ二側から注文される商品の割合は、半々にまでなっている。

「春日君、大丈夫? これから大変かもしれないけれど、君ならできるよ」

「は、はい。部長、本当にありがとうございます」

そう言っつて、ぺこりと頭を下げると、周りから「頑張つて」という声と拍手が上がった。

本当に私は、職場に恵まれている。

「チームは来週から本格的に始動するから、無理しすぎないように頑張つてね」

はい頑張りますと部長に返し、席に着く。今はとりあえず目の前の仕事に集中しようと思ひ、さつき夏目さんから指示された、書類の訂正作業を始めた。

相変わらず丁寧な説明が書かれたふせんを見ながら、報告書の直しを終える。

そのあと仕事に集中していたら、芦田さんから、お昼だから休憩行ってこいと言われた。ずしりと重いお弁当の包みを持って、屋上へ向かう。

元は調理師の専門学校だったという、四階建ての本社ビル。オフィス街に位置しているため、周りは綺麗で大きな高層ビルがほとんどだ。何十年もの時を重ねて外壁にところどころひびが入っている上、こぢんまりとしたうちのビルは、明らかに浮いている。

だけど、就職面接でこの本社ビルを訪れたとき、絶対にここで働きたいと思った。

古い長屋やお店が立ち並ぶ下町で生まれ育った私が、ぴかぴかしたビルなんかで働いたら、毎日会社に行くたびに緊張してしまうだろう。

唯一不満を上げるとしたら、エレベーターがひとつしかないのです、社員は基本的に階段を使うのが暗黙のルールだということ。

太めの私は階段をふうふう言いながら上り、屋上の重い扉を開く。入社したばかりの頃は、食堂で先輩とお昼を取っていた。けれど一ヶ月も経つ頃には、一人でここへ来るようになったのだ。

会社の向かいに墓地が広がっているせいかな、この屋上には霊的な噂が絶えず、人があまり近づかない。けれど私はオカルトなことに興味がないので、全然気にならなかった。

初夏の青い空と爽やかな風が気持ちいい。指定席である奥の貯水塔の裏へ、鼻歌まじりで向かう。

そんな私の目の前には、柵さくの向こうに広がる墓地と――

「……お疲れ」

一晩中、私を寝かせてくれなかった人がいた。

十

かちんと体が固まり、口だけをなんとか動かす。

「……どうして、ここに……」

「お前、いつもここで昼メシ食べてるだろう」

そう言って、夏目さんは柵の台に座った。いつもの私の指定席に。

「突っ立っていると、休憩終わるぞ」

こちらを見ながら言われ、少し迷ってからなるべく距離をあけて隣に座る。

ど、どうしよう。何で、私がここで飯食べてるのを知ってるの？ ていうか、何で、彼がここにいるの!?

「食べないのか？」

どんな顔をすればいいかわからないのに、こんな近くで平然とお弁当を広げるなんて、できるわけないでしょ！

……とは言えず、代わりに私のお腹が、ぐーっと大きく返事をした。

「腹減ってんだろ。早く食べれば」

ううっ、今すぐここから逃げ出したい。

顔の熱をもてあましながら、可愛くない大きさのお弁当箱を鞆かぼんから取り出す。ハンカチをほどいて、夏目さんから中身が見えないように蓋ふたを立てた。

すると、隣からぶほっと音がした。振り向くと、夏目さんの背中が震えている。

「弁当隠すって……。お前、中学生かよ」

声から笑っているのがわかって、体まで、かあっと熱くなる。

だっ、誰のせいだと思ってるの？ もう、やだよう！

急いで蓋を閉めて、立ち上がろうとしたときだった。

「ごめん、馬鹿にしたわけじゃないから。気にせず食べる」

昨日みたいに、彼が私の腕をつかんだ。

「……腕、放してください」

「ごめん」

夏目さんは、手を離して私に背中を向ける。

……つかまれたところが、心臓になったみたい。私、何でこんなにどきどきしてるの……？

ふうっと大きく息を吐いて、再びお弁当の蓋を開けた。緊張しているにもかかわらず、油の匂いと、こげ茶色の衣をまとうエビやお肉に、激しく食欲を刺激される。

私は両手を合わせてから、箸はしを伸ばした。冷めても美味しいお父ちゃん特製の揚げ物と、濃い目

に味付けされたお母ちゃんの煮物は絶品だ。

「なあ。何で、そんなに豪華なんだ？」

突然、問いかけられ、夢中で動かしていた手と口が止まる。振り向くと、夏目さんの視線が私の膝の上に向けられている。

……見られてしまった。

店の残り物を詰め込んだ、重量級のお弁当。

昔から、お弁当のときは同級生たちに押揃やっ揃されていた。そんなの食べてるから太るのだと。

「すっげえ、うまそうだな」

「……へっ？」

予想外のセリフとともに伸びてきた手が、残しておいたエビフライをつかんでいく。

「うん、すげえうまい」

目の前には、表情を緩ゆるめて口をもごもご動かす夏目さんの顔。

「……私の、エビちゃん」

つい、そんな言葉が漏れてしまった。

「なんだよ。じゃあ返す」

夏目さんは、半分になったエビフライを差し出してくる。

「け、結構です」

ぶんぶんと顔を左右に振ると、彼はそうかと言って、残りを口の中に放り込んだ。そして尻尾だ

けを、お弁当箱に返す。

「お前さあ、一人っ子だろ」

指を舐めながら、夏目さんがさらに質問してきた。油で光るその唇を見ていたら、よからぬことを思い出しそうになって、私は顔を逸らす。

……なんか私、変態みたい。

「は、はい。一人っ子です」

「やっぱりな。うち男兄弟なんだけどさ、うまいモンは取り合いで、絶対に譲ったりしないからな」

兄弟がいるんだ、なんて思ってたなら、夏目さんが立ち上がり、黙ってどこかへ行った。

……今のは何だったの？ 幻？

しばらくぼかんと口を開けていた私は、気を取り直して残りのお弁当を口に運び始めた。そうして、最後のお楽しみに箸を伸ばしたら――

「お前、かぼちゃ好きなんだな」

大きな影が覆いかぶさってきた。

何で？ 部署に戻ったんじゃないの!? あつ、またおかずを取るつもりじゃ……

「大丈夫だ、取らないから」

……どうして、私の思ってることがわかるんだろう。

驚いている私に構わず、夏目さんは、さつきよりも近い位置に腰を下ろした。

「さつきのごち代」

二人の間に置かれたのは、昨日と同じミルクティーの缶。それを見た瞬間、どんと心臓が鳴った。

「これ、好きだろ」

はいと答えながらも、箸を持つ手が震える。大好きなかぼちゃの煮つけが、上手くつかめない。

「なあ、やっぱりくれ」

えっ？ と思つて顔を上げると、夏目さんの顔がすぐ横にあった。

「食わせる」

言葉に詰まる私の前で、夏目さんの長いまつ毛が伏せられ、口が大きく開いた。

……えっと、これはもしや、あーんしてってこと？

どっかんと、頭の中で爆発が起きた。

「早く。休憩終わっちゃう」

私は、なんとか指を動かして、かぼちゃを箸で挟む。そして落とさないように気を付けながら、綺麗な白い歯が並ぶ口に入れた。

「うん、うまい」

口を閉じてでもごもご動かしただと、夏目さんが満足げに言った。

昨夜と同じその笑顔が、私の胸の音をどんどん大きくしていく。

「……良かったです。全部、両親が作ったものなんです」

そう言いながら、熱い顔を隠すようにして、お弁当箱とお箸をしまった。

「自分で作ってるんじゃないのか」

「はい。実家が洋食屋なんで、残り物を詰めてもらってます」

夏目さんも同じミルクティーを飲んでる。

「そうか。お前、いい意味で会社の男どもに誤解されてるな」

「誤解？」

私が首を傾げると、夏目さんがため息をついた。

「……そうやって無防備に、誰にでも愛想振りまくからだ」

顔を覗かれて、どくと心臓が鳴る。

「傍にいると癒されるとか、そういう評判を聞くたびに、俺は腹が立って……ああ、お前って呼ばれるの嫌だよな」

一昨日までは「春日さん」って呼んで、感情が読み取れない、丁寧な話し方をしてたのに……

「千歳、これからは気を付けるよ」

男の人に名前を呼ばれ、激しく動揺した私は、お弁当箱をコンクリートの床に落としてしまった。慌てて立ち上がり、拾って鞆に入れる。

「千歳って、どんくさいよな」

その言葉を聞いて、急に体温が下がるのを感じた。

「……すみません。気を付けます……」

「何で謝るんだ。……ごめん、また間違えた」

そう言っつて、見たことのない表情を浮かべる夏目さん。それは明らかに、困っている顔だった。

「可愛いつて、言いたかったんだ」

私の顔を覗き込み、夏目さんが言う。

「……なっ、なっ、あっ、あの」

可愛いなんて、お母ちゃん以外の人から真剣な顔で言われたのは初めてだ。

しかも、こんな整った顔をした、女子から人気がある男の人から言われて、どうしたらいいかわからない。

頭の中を色々な思いがぐるぐると駆け巡る。耐え切れなくなって、自分から口を開いた。

「……あの、昨日から、私をからかって楽しいですか？」

目の前にある彼の顔が、かちんと固まった。

ど、どうしよう。私、何でこんなこと……

気まづくなって逸らそうとした顔を、両手で包まれる。そして、強く引き寄せられた。

「んっ！ ……んんっ！」

唇に押しつけられたのは、昨日と同じ味がする唇。……やっぱり、目は閉じられなかった。

「……からかってなんかない。俺がキスしたのは、千歳だけだ」

昨日の軽く触れるだけのものとは違う、長いキスを終ええると、夏目さんが真剣な顔を向けてくる。

「千歳は、どうなんだ？」